見慣れた景色
見慣れない風景

見慣れた景色、見慣れない風景

高輝度蓄光材を用いた災害記憶表現の提案

01.“古きもの”としての災害遺構

2011年の東日本大震災以降、日本で「災害遺構」という言葉が注目され始めた。現在、自然災害の記憶として残されるべきものは、人の手が加えられ不自然な遺構として冷凍保存されようとしている。人間の物理的な手段で自然に抵抗する手法は自然に対する敬意や感謝、責任すら棄却しているように思える。

02. 対象敷地 熊本県南阿蘇村 崩落斜面地

多くの住宅が倒壊し尊い人命が犠牲となるとともに、地域を結ぶ幹線道路や橋梁、水道等が被害を受け避難生活や仮設住宅等での生活を余儀なくされている。また、農地や鉄道、観光関連施設等も被害を受け、本村のなりわいにも大きな支障が生じている。震災から2年半経過した今でも復旧にはまだ時間がかかる。

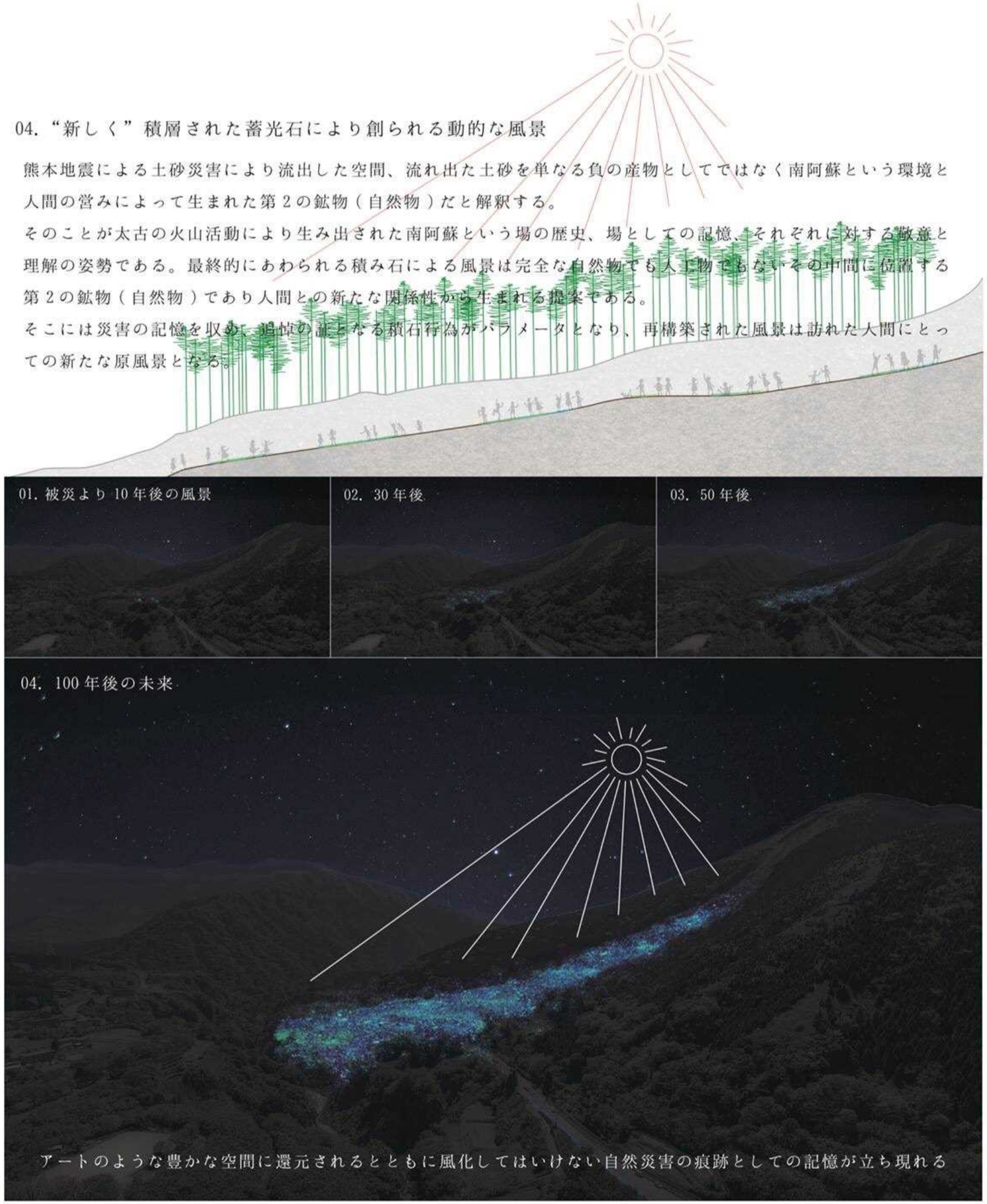
03. 提案

崩壊した姿も自然の摂理であると考える。この過程こそ自然の本質なのではないだろうか。そんな記憶としての災害遺構はどうあるべきなのか。どう守ってゆくか。どう継承するか。人と災害遺構との新たな関係性を提案する。

記憶表現手法：高輝度蓄光材を用いた積み石

失われたリンクを繋げるデザインとして蓄光材というエナジーニュートラルな光を用いて“自然というものがいかに恐ろしいか、いかに美しいか”を“全て流されてしまった”石で表現できないだろうか。本提案では積み石という行為に着目したプログラミングを提案する。

〈システム〉日中は太陽からの光を蓄え、日が落ちれば光を放出する

04.“新しく”積層された蓄光石により創られる動的な風景

熊本地震による土砂災害により流出した空間、流れ出た土砂を単なる負の産物としてではなく南阿蘇という環境と人間の営みによって生まれた第2の鉱物（自然物）だと解釈する。
そのことが太古の火山活動により生み出された南阿蘇という場の歴史、場としての記憶、それぞれに対する敬意と理解の姿勢である。最終的にあわられる積み石による風景は完全な自然物でも人工物でもないその中間に位置する第2の鉱物（自然物）であり人間との新たな関係性から生まれる提案である。
そこには災害の記憶を収め、追悼の証となる積石行為がパラメータとなり、再構築された風景は訪れた人間にとっての新たな原風景となる。